

令和元年度 一般社団法人農村文明創生日本塾

日本塾

農村文明創生ツーリズム パイロットツアー2019 ～100年後の農村文明を守り育てるしくみづくり～

議事録

日 時：令和2年1月25日(土) 午後1時15分集合
令和2年1月26日(日) 午後3時30分解散

<旅程>

日程	時間割	摘 要
第1日目 令和2年 1月25日 (土)	テーマ：ジオパークと田園都市	
	13:15	東北新幹線 くりこま高原駅 集合
	13:30	バス移動
	14:00	栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターにて、栗駒山麓ジオパークの取組の説明と意見交換
	15:10	農村景観の視察（長屋門、がんのねぐら入り等）
	16:00	ホテルチェックイン（栗原市内「エポカ」）
	16:30	ホテル会議室で講義（講師：丁野朗氏）と意見交換
	18:00	交流会：エポカ 21 楓の間
	20:00	解散
		宿泊（ホテルエポカ：宮城県栗原市志波姫新熊谷 279-2 / TEL：0228-23-8866）
第2日目 令和2年 1月26日 (日)	テーマ：農村文明と田園観光づくり	
	08:30	ホテルエポカ 発（バス移動）
		伊豆沼のマガン視察
	08:40	くりでんミュージアム視察
	10:00	伊豆沼農産にて講演と意見交換
	10:40	くりはらツーリズムネットワークの活動報告
	11:10	意見交換
	11:35	施設見学（直売所、生ハム工房体験室）
	12:00	昼食（伊豆沼農産）
	13:00	講評：宮口侗迪早稲田大学名誉教授
	14:30	意見交換会
	15:00	バス移動
	15:30	くりこま高原駅 着 解散

第1日目

東北新幹線「くりこま高原駅」に集合し、バスでの移動中に栗駒山麓ジオパーク推進協議会事務局長の二階堂秀紀氏より、栗原・登米地域の地勢や歴史、ラムサール条約の取組、マガンの飛来などについて説明を受けたのち、「栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンター」にて、栗駒山麓ジオパークの取組の説明を受けた。

その後、ホテルまでの移動中に農村景観の視察、長屋門の見学を行い、ホテルにてANA総合研究所シニアアドバイザー、(公財)日本観光振興協会特別研究員の丁野朗氏の講演を聴き、意見交換を行った。



移動のバス車中での説明



栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターでの説明

一般社団法人 農村文明創生日本塾 田中 代表理事(南砺市長)の挨拶の後、栗原市千葉市長様より挨拶があった。

■ 挨拶：栗原市 市長 千葉健司 氏

栗原市長の千葉でございます。本日は、農村文明創生日本塾の見学ツアーということで、日本全国から首長はじめ多くの方にご参加いただきありがとうございます。

今回見学いただく伊豆沼は、釧路湿原に次いでラムサール条約に登録されました。今から 35 年前の昭和 60 年、本州では初めての登録です。今でいえば、SDGs として栗原の 10 か町村で守ってきた結果です。市になってからはジオパーク活動にも取り組み、昨年 12 月 25 日には初めての免許更新を果たすこともできました。これから様々なかたちで、観光をテーマに、まちづくりをしていかなくてはならないと考えています。造語で私の公約でもあります、「田園文化観光都市」として、観光と文化を結び付けながら掘り下げていきたいと思っています。「栗原遺産プロジェクト」として現在 5 つある国の重要史跡だけでなく、農村にある原風景をブラッシュアップして観光資源に役立てたいと思っています。

平素は丁野先生には様々な観点から多大なご指導をいただいております。本日は大変残念ですが、公務がございますので時間になりましたら中座させていただきますのでお許しいただきたいと思っています。本日は料理だけでなく、日本酒の里として 6 蔵あるうち現在稼働しているのは 4 蔵ありますが、普段は自分も飲めない良いお酒を提供させていただきますので、ご堪能ください。ご参加の皆様の益々のご活躍とご発展をお祈りしてご挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。



■ 講演：丁野 朗氏

ANA総合研究所シニアアドバイザー、(公財)日本観光振興協会特別研究員

10 数年前から栗原とはいろいろなお付き合いをさせていただいている。細倉鉦山という 1200 年前からの鉛の鉦山を、経済産業省の近代化産業遺産群のひとつとして認定した際に関わっている。私自身、農村文明塾とは 1 年くらいのお付き合いで、田中市長ともいろいろとお付き合いがあり、現在、理事として参加させていただいている。今回は、皆さんにフィールドで学んでいただきたいと思います。

今日は時間も限られているので、オムニバス風に 3 つのお話をする。

「田園観光都市」とは、栗原市で 10 年ほど前に「田園観光」という言葉を使ったが、イギリスのグリーンツーリズムの考え方の中に、私たちが考えなければならない要素がある。

2 つ目は、私が日本遺産の選定に関わっており、農村エリアの物語があり栗原やその他の地方に応用できないかということである。

3 つ目は、「田園観光都市」のこれからの 10 年を考えなければいけないということである。岩手・宮城の大震災で残念ながら亡くなられた麦屋弥生さんが最初のビジョンづくりをしたプログラムから 10 年が経過した。

<グリーンツーリズムについて>

グリーンツーリズムの発祥はイギリスの北の方といわれている。日本では 1992 年に農水省がつくったグリーンツーリズム研究会からスタートした。イギリスははじめヨーロッパでは 19 世紀に機械化により使われない小屋などを利用した民宿経営から始まった。今のようなグリーンツーリズムが確立されたのは、1970 年代のことで、五月雨式ではなく組織化されながら制度化されるという経緯である。

第一段階としてイギリスでは協会をつくり全国組織となった。これは日本の農水省が始めたグリーンツーリズムとは異なるもので、グリーンツーリズムとは何かという概念を議論した。1980年代後半、環境、コミュニティ、来訪者のバランスをどのようにとっていくかということである。

そして、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた地球環境会議でサステナビリティという考え方が提唱された。1980年代に農場ホリデー協会が設立され、農家の個々の取り組みから複数農家による地域内ネットワークとして全国組織となった。先駆けは湖水地方ペナインの6つの農家グループの



結成とグループ化である。国としても支援をするが、日本の公的支援と異なり、農家による主体的活動が成熟してから支援するという。これは大変重要なことで、補助金があるからやろうかということではなく、活動が成熟して自走できるから支援しようということである。補助の在り方も成熟しなければならず、単一の補助金であるとその基準に合わせてしまうので、複数の機関から違った視点で支援するということである。現在、内閣府の地方創生で柔軟なものもあるが、そうはいっても制約はある。プロジェクト形式で継続的に支援する自立支援策で、日本の支援策と違いがある。

第二段階として「グリーンツーリズム概念の確立」。グリーンをツーリズムする、ツーリズムをグリーン化する。ここで大事なことは、開発スケールを地域に合った形で適正化すること、そしてその地域にある資源を多面的に発掘・活用する。使用人は地域内で循環する、地域住民がコントロールする、地域サービスの維持に貢献するツーリズムといった、グリーンツーリズムの基本的な考え方を示している。

第三段階はさらに持続可能性という概念から検証するという。持続可能なツーリズムにかかる問題意識のうち、特に小さなコミュニティの個性的な存在をいかに存続させるか、ここに大きなウエイトを置いた。戦略の基本原則として食の供給の考え方、市場の成長にあったキャパシティ、過剰な供給の回避である。地域の経済が自立し循環していくこと、これができていないことが多いので、重要である。質の高い農村・農業体験の普及促進、現在のグリーンツーリズムは成功したモデルを見習いながら運営されているが、ワンパターンになっている。これを本来の質の高い農村体験をしてもらうということである。これらの前提として魅力的な農村景観の保全が必要だ。

そして一番大切なのは、地域が自ら意思決定するということである。日本では、これらがどのようになっているか検証しなければならないが、この3つの段階を経て、グリーンツーリズムを推進していこうということである。これらが重要なポイントになる。

日本のグリーンツーリズムを振り返ると、農水省が提唱してから約30年になるが、やはりワンパターンという印象がある。官製ということで、農村地域の自主・自立の風土ができない、補助金依存体質から脱却できないという問題である。そして、本来の農村で長期滞在する、つまり暮らすということの魅力が活かされていない、ワンパターンで押し付けになっているという問題である。

本来、農漁村エリアは歴史、文化、芸能の宝庫であり、例えば島根や鳥取など中央から離れた場所にいくほど芸能が色濃く残っている。鳥取では日本遺産として麒麟獅子舞が認定されたが、140のコミュニティでそれぞれ違っており、それぞれが誇りをもって伝えています。

今、都会の人たちが農漁村に魅力を感じるのは昭和30年代の景観が色濃く残っている点である。農漁村の本来の魅力が活力になる。これは次元が違うが、中高生の時に農家民泊体験しても、やがて結婚して子どもが生まれても（大手の旅行会社も扱っていないため）このような体験ができない。分断されている。つまり、地域側に申し込みのワンストップの受け皿がないと、グリーンツーリズムは成立しないということである。大分や多治見、飯田にはしっかりと受け皿ができています。

＜田園地域の物語づくり＞

田園地域の物語づくりである。日本遺産が 2015 年からスタートした。日本遺産では、個々の文化財よりもその背後にある地域の歴史文化そのものをストーリーにしよう、そのストーリーを日本遺産にしようというものである。それぞれの文化財ではなく、なぜこのようなものが生まれてきたか、ということの説明するものである。要するに、日本を象徴する 100 の物語。今年 5 月の最後の認定で 100 になる予定。

固いイメージのある日本遺産だが、初年度認定の鳥取県三朝町では、「日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉」というネーミングで、とても文化庁では考えつかなか

ったものである。「こんな所に日本遺産？」などもあります。三朝町では、物語からいろいろなことを事業化したいという思いがある。ラドン温泉を利用した「ラジムリエ」を養成し、温泉の魅力を広めていきたい。病院とタイアップして「現代湯治」を提供し、地産地消の食材を提供する設備の整備、来場者に登山靴ではなく「わらじ」を用意するという、すべて有料プログラムであり、物語を追っていくうちに知らず知らずのうちに金を使ってしまうという仕掛け。喜んで財布を広げてもらうことはとても大切である。



＜物語と推進体制＞

日本遺産は文化庁もだが、内閣府が入っているので、地域づくりについての将来像と実現に向けた具体的な方策が適切に示されているということと、そしてその事業を誰がやるのかということである。物語はシナリオライターでも書けるが、推進体制までは作れない。

現在 83 件で、旧石器時代から大正までのものまである。縄文時代の新潟県十日町と、弥生時代の熊本県山鹿市を例に挙げるが、これらの地では古墳がたくさんある。これは財の蓄積であり、原点を担ったのは米作りである。

資料の写真は古代山城鞠智城（きくちじょう）。中国の上海辺りの寺院に似ている。そもそも大宰府への米と兵の供給基地であった。

ストーリーとしては、二千年前から米作りの文化があったということ。その証拠に鉄製農具がたくさん出てきている。菊池川流域は加賀と並んで大阪の米相場が高かったという。それらの財が装飾古墳に結び付いた。山鹿市には条里制跡があり、その裏側の菊池は井出という用水路が整備された。近世になると海の近くに巨大な干拓地を作った。地域文化や祭りが米と結びついている。栗原も同様の物語が書けると思う。農業用水路を利用したラフティングなどもある。

十日町では「なんだこれは」というキャッチフレーズがある。雪国の生態、植生の特色を生かしている。雪と暮らすこと、建物の 2 階と 3 階の間にはしごを掛ける。十日町の雪まつりは日本最古の雪まつりである。



信濃川流域に火焰型土器は集積しており縄文文化を作っている。地域の中でツーリズムをつくり、縄文女子旅を推進している。この地は、飯山、上越と越後湯沢に挟まれているので広域連携している。また、地域内でアート作品を展開している。これを回すためのカーナビを開発した。女子旅では宣伝費がなかったので「縄文人」というフリーペーパーを利用したところ、2日間で40万人から反応があった。今はこの人たちのネットワークがある。また、「5000年シリーズ」という縄文人が食べたかもしれない産品をパッケージ化している。

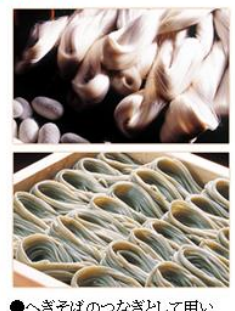
＜新たな田園観光都市づくりに向けて＞

今は12万羽の雁とのことだが、6万羽と認識していた。栗原を「田園観光都市」と名付け、本格的なビジョンを指導した麦屋弥生さんは財団JTBにいた方だが、地域プランナーとして活躍された。彼女が非常に大事にした場所が、この栗原であった。今から10年前の地震で発生した土石流が原因で亡くなられたが、彼女を振り返ってみたい。亡くなる年の3月に、「くりはら田園観光都市」づくりの報告書がまとまったが、その中で5つのことをいっている。地域の総合力をどう生かしていくか、観光というのは権限なく、地域が行政の枠を超えて総合力を生かさなければいけないということであった。もう一つは一手間かけて田園の魅力を継承すること。一手間という言葉はとても良い言葉だと思う。まちづくりとは時間がかかり「まちづかい」「まちづくろい」という言葉を使う。

時間をかけないと人間の魅力は継承できない。「くりはら時間」だが、時間とは地域の文化を体現している。都市とは違った見えない時間の流れを大事にするということである。不特定多数を集めるよりも、相手をわかかっていて、呼びたい人を呼ぶということが大切。何度も交流を重ね、どういう地域づくりをしたいかということ。時代とともに人のニーズも変わるので、既存資源とミスマッチを起こさないために見直して再構築しようということである。田園観光都市のアクションプログラムを作るときには、このようなことを大事にしないといけないと思う。

近世近代は、産業と都市が密接につながっている。鉾山地域、シルクなどの繊維地域、電源地域、港湾地域、そして農村地域である。農村地域はすべての産業のインキュベーターであり、資源も多様である。今日見ただけでも水車、棚田、長屋門などがあり、山形では紅花や藍、陶器、愛媛の和ろうそく、和紙など多様な資源がある。日本中にこのような資源の豊富な地域がたくさんある。これらは、たまたまあるのではなく都市のストーリーと密接につながっている。これらをきちんと見抜いていくことが大切である。

火焰型土器の優れたデザイン感覚が、地域の「アート」の遺伝子となった？



●火焰型土器を生んだ大地と豪雪の風土で繰り広げられる「大地の芸術祭」「雪まつり」などは、この地域のアートの遺伝子でもある。

●へぎそばのつなぎとして用いられる「ふのり」は、もともと糸の糊付けに使われた。
●また見た目にも美しいへぎそばの盛りは、その織物の「かせぐり」の動作・形から伝わった伝統技術と考えられる

農村文化創造部＝栗原・巻

23



農村地域を支えるインフラも大きな着眼点である。農業水車、農具、農業施設として福岡県朝倉市の三連水車、産業インフラとして道路、河川、生活インフラとして愛媛県内子町の内子座、ソフトインフラとして農業技術、芸術などである。織物の中では様々なデザインがある。シーツ代だけで泊まることのできる四国巡礼の善根宿は弘法大師の思いに触れるという考えがある。これらは都会にはない地域のものである。水車一つとっても様々な使い方があり、様子も異なる。栗原は米作りが盛んであり、水を制することが求められる。

右の写真は栗原市一迫（はさま）の頭首工の写真だが、古くから農業用水を利用している。

次の写真は、ジオパークでもご覧になった、荒砥沢の大地すべりの様子。今日は佐藤家の長屋門も見学したが、現在この地域では長屋門は350となっている。茅葺で、北欧でマークあたりの農家とよく似ている。



ジオパークで地形を見ていただいたが、栗原市は10町村が合併したため、それぞれの地域以外に出ることがなく、地域自体がどのようなになっているか意識したことがなかった。景観形成基本計画のとき、山岳エリア、山麓エリア、里山エリア、平地エリアと、それを分けるのが迫川3本で、奥州街道がつないでいる。

治水技術や築城技術、鉱山技術など旧町村を超えてトランスファーされていく。このようなものをいろいろな形で編集して、地元で共有していくことが大事なことである。語りの素材を持ち、それを共有することである。

最後に、農業・農村環境とツーリズム、コミュニティをいかにつなげるかが大切であるということである。農村も厳しい状況で、地方創生も推進されているが、そこに住む人たちの満足度を高めない限り、今後立ち行かないだろうと思う。技術力だけではいけない。

● 意見交換

- 田中：20 年位前からグリーンツーリズムに取り組もうとしている。その頃は農水省、文科省、総務省と一緒にやってやろうと機運が強かったのだが、日本人に合っているかが疑問のところもあり、今ようやく広がりつつあるように思う。環境（サステナブル）の問題と、ヘルシーツーリズムのようなものをセットにして考えていくと、まさにこれから体験という者が花開いていくと思う。この点について伺いたい。
- 丁野：その通りだと思う。自分自身は農水省などと深い付き合いはないが、先ほど日本のグリーンツーリズムの問題点を話したときに触れた、資源の使い方の問題があると思う。とても一面的に思える。ほんとうに魅力が伝わっているのだろうかと思う。
- 田中：インバウンドとの関係性はどうか。
- 丁野：明日行く予定の伊豆沼農産では海外のお客様を受け入れるためのマネージメントを実験しているようだ。農家に過度の負担を強いると参加できなくなる。このため、予約、決済などを組織で対応する。十日町などでも全く同じ状況で、資源は豊富だが機能が必要だ。
- 田中：民泊などインターネットを利用できるサイトがあり、タイミートラベルでは南砺のパプリカ農家に来て農作業を手伝いご飯を食べるというものだが、すごくヒットしている。今後はこのようなものに変わっていくのかなと思う。
- 佐々木：グリーンツーリズムについては、自分が町長になったときに6次産業がはやった中で、農家の人たちは全くやる気がなかった。しかし奥さん連中は大変興味を示し、町として支援し続けていて、最近、移住した新規参入農家の若い人たちが当たりだした。宿泊施設などで町として支援しているが、体験した人たちが遠軽に来たいと思うようになった。地域おこし協力隊で来たいという人も出てきた。ジオパークもやっているが、町として観光に乗り出すと本腰を入れてやり、利益を出さなければいけない。旧町の施設を引き継いだ温泉施設など毎年2千7百万円の赤字を出してるものもある。町のためにやるのだが、本当にこれでよいのか不安になる。投資に対するリターンを考えると悩ましいことだ。
- 丁野：日本遺産が83あるが、その中で、自分で組み立てられるところは一握りだ。観光を続けることは難しい。
- 井上：飯田では昭和30年代に農家民泊を始め、グリーンツーリズムの走りだと思うが、そもそも農家民泊では、観光では食えない。農家を元気にする効果を考えるべきだ。飯田では、農家は5年くらいで次の担い手が帰ってきた。グリーンツーリズムで儲けることではなく、元気になることが効果だ。グリーンツーリズムのための体験型観光のため南信州観光公社を作り、昨年飯田市観光協会を吸収し、DMOになった。グリーンツーリズムだけでなく、一般の観光も扱っていく方針だが、まだ芽吹き段階であり、成果にはつながっていない。

以上

第2日目

国の天然記念物であるマガンやラムサール条約に登録された伊豆沼などをバスの中から視察。くりでんミュージアムを視察、伊豆沼農産にて昼食を摂った後、講演と意見交換。

直売所、生ハム工房体験室などを見学した後、農村文明創生日本塾有識者理事の講演と意見交換を行った。

■ 講演：伊藤 秀雄 氏

有限会社伊豆沼農産 代表取締役

<伊豆沼農産の概要>

伊豆沼の3分の2程度が登米市域である。伊豆沼の南に長沼がある。伊豆沼の方が有名であったが、小池知事が東京五輪のボート・カヌー競技会場を宮城県長沼ボート場（登米市）に変更する案を打ち出したことから世の中に知られるようになった。

冬はマガンの飛来が毎年20万羽ともいわれるが、その大部分はこの周辺にきている。伊豆沼の面積は300haほどであるが、夏にはその3分の2ほどを蓮の花が覆いつくす。

当社は昭和の終わりに設立し、32年目を迎えている。資本金500万円でスタートし、現在は3,000万円である。肉を卸す食品処理業と輸出の許可を得て、2004（平成16）年から香港に輸出している。Youtubeで映像を紹介している。

組織体制としては、代表取締役、取締役副社長、専務取締役がいるが、組織図には敢えて入れていない。40名の会社なのでできるだけ速く正確に情報を共有し、決済も可能にするため、中間管理職は設けていない。取締役は農業部門、加工部門、販売部門（農場マーケット、農場レストラン、通信販売、卸部門）及び総務・経理の各部門に配置している。

また、農村産業研究所を設けているところが普通の農業法人とは違うところであると思う。これからの農村の産業について研究している。

理念は3つある。ひとつは地域資源を活用して最適な産業を創造し続ける。環境の変化に応じて産業も変化し続ける。2番目は人間関係で、win-winにしていく。3番目は社会貢献。この地域は宮城県内でも開発が遅れたために価値が最も残っているので、人が自然に関わっていこうということである。ラムサール条約では「ワイズユース（賢明な利用）」を奨励している。それは人間が自然に関わり、利を得て、その利を自然に返していくということである。そのような好循環を目指すものである。釧路湿原が第1号であるが、釧路湿原は人里から離れているのに対し、伊豆沼は昔から人が関わって共生してきている。

登米市の環境条例でも産業と自然の共生を掲げている。伊豆沼をいい意味で活用しながら、伊豆沼のためになっていくような取組をしたいと考えている。

レストランのメニューは英語・韓国語・中国語で表示している。豚肉料理が多い。赤毛の豚を2002年に発売し、ブランディングのひとつとして、横綱の胸を借りる意味で、鹿児島県の三越で販売したところ、テレビのニュースで取り上げられ、認知されるようになった。第三者からの情報は価値がある。

食育は震災の年から行っている。微生物を越冬させ、春に増え肥料になる。無農薬・無肥料で米を栽培している。



当社の視点は5つある。

① 「農業の視点」

② お客様の視点：マーケットインの視点

お客様の視点の方が当然高いものではあるが、作り手の想いをお客様に訴えることや意見を聴くことは同等の価値がある。

③ 地域の視点：地域にあってどのような役割を果たすのか。

④ 女性の視点：誘客のためには女性の視点。

⑤ 運動の視点：農業は食料供給、環境問題も重要。

6次産業化では、1次2次3次が順番のように考える人もいるが、何も知らない農家にはすぐ加工することは無理なので、まずは直売所で直接販売することから始めるべきと考えている。値決めや対価を得ることなど基本的なことを体験してから6次産業化ではないかと考えている。

産学官連携で、助成金や施設を最大限利用して取り組むべきだ。商品開発はほとんど産学官連携で行っている。伊豆沼のハスの花を使った化粧品を開発し、販売している。甘酒を配合したところ、非常に好評である。

地域連携で「あるもの探し」をしているが、一番の資源はヒトであることに気づいた。「しゃべり場倶楽部」として毎月20名ほどを対象に1時間のスピーチをしてもらっている。これまでに108回開催している。日頃から会っている人たちなので、知っていることが多いが、全く知らなかったことに気づくこともある。

普段食べているものを冊子にし、レシピも盛り込むプロジェクトも行った。

農村の未来：今後増えるのは高齢人口であり、経験豊かな人口が増える。資源は見方によっていくらでもあるので、健康寿命を延ばすため、高齢者が担い手になることを考え、取り組んでいる。

発展的な意見交換ができる場が必要である。そのためには人を呼び込む。海外からのインバウンドの呼び込みに取り組んでいる。オリンピックでは海外から大勢の人が来るので、東北にも来てくれると考えている。そのための環境を整えれば、ウィークデーにも人に来てもらえると思っている。

地域でいままで活躍していなかった人（高齢者）の活躍の場を作りたい。

企業向け研修にも取り組んでいる。100億円の企業を目指すのでもいいが、1億円の企業を100社作りたい。

農家は誠意をもって作物を提供し、消費者には理解して支えてもらう。

■ 講演：大場 寿樹 氏

一般社団法人 くりはらツーリズムネットワーク 事務局長

初めの写真は、地域で栽培しているレンコンを収穫しているものである。いい表情をしているが、モデルではなく、一般の参加者である。最も大きな動機付けとしては、このような笑顔が地域の中で見たいということである。

自分の趣味は、栗原市の観光課時代から田舎の風景や手仕事の技など、人に会って話を聴くことが好きで、憧れに近い感情を持っていた。そこから、藁（わら）のある風景やそれを使ったものづくりが趣味であり、自分で行うようになって特技にもなってきた。

市役所を辞めた際に、自分の好きなもので生計を立てたいと思った。「見る・観察する」ことでは、直接案内する仕事など、わら細工は体験指導するようになり、マガンやオオハクチョウの観察の仕方をガイドする仕事に繋がっている。最近の趣味としては自転車でキャンプに行くなどしており、これも自転車のガイドの資格を取り、ツアーの受入れや案内などの仕事に生かしている。



当法人は設立が2010（平成22）年3月21日で、2016（平成28）年4月1日に法人化した。

きっかけは、栗原田園都市創造事業である。そこで出会いがあり、資源をみて、感じたのが民間の力である。それを発揮するプレイヤーが足りないと思い、それらの力を結集したいと考えたのが団体設立のきっかけである。事務所は長屋門のある空き家の活用である。事業を進めるために購入する予定である。若い世代の知恵も入れながら組み立てていきたい。最低でも長屋門で宿泊してほしいと思っている。

現在の事業内容としては、体験プログラムという短時間のイベントが主で、年間150回程度開催している。販売事業や研修事業を加えると200回を超えている。観光に由来するものが多いが、サンクチュアリセンターつきだて館（昆虫館）の指定管理事業も行っている。ワークショップやオリジナル商品の開発等も行っている。しかし、事業数の割に集客数としては2,000名程度なので、少ないのが特徴である。

開始後5～6年程度は、10町村の合併直後ということもあり、8割以上が市内からの参加であった。その後、最近3～4年では比率が逆転し、約65%が市外からの参加である。市外とは、登米市、一関市、大崎市などの隣接市と仙台で、中には東京・大阪や海外からの参加者もある。

地元の人たちが、ものがない時代に工夫してきた技や知恵を大事にし、伝えていきたいと考えている。

<体験プログラム>

- ・ がんづき：蒸しパンのような郷土料理。直売所では販売しているが、家庭で作ることは減っていたので、教室を開いた。そこでは、「めかご」という農閑期の女性の手仕事でつくる竹製のかごを型にして使うことを紹介している。昔のものをただそのまま伝えるのではなく、現代のものと融合させている。
- ・ 豆腐づくり：大豆の産地である。型を地元の材料で作ってもらい、セットで販売もしている。
- ・ じゃばら切り干し大根：大根を蛇腹状に切って干した切り干し大根。古い技だけでなく、いろいろなアレンジが加えられているものを紹介している。
- ・ お菓子づくり：地元産のイチゴを使ってタルトを作る。大事なのは手づくりと考えている。
- ・ 地元食：郷土料理には出てこない食材も使った料理を体験する。
- ・ レンコン：収穫だけでなく、種芋の植え付けから、草取りもして、花見も行い、料理教室でレンコン料理を習得して、レンコンを収穫するというもの。仙台圏の女性の参加が多かった。

麦わら細工：麦のオーナメントという北欧由来の飾りづくり。江戸時代から続く農家のお嫁さんが農作業の一環で麦を育ててパンづくりをしていた。草刈りの参加者は大変であったが、体験プログラムにすることで自分の楽しみを発揮する場所が作れて、教えることによって技術が向上し、家族の認知も上がる。

- ・ 最近多いのは、農作業体験だが、それは農繁期に重なるため、そのプログラムを提供する人は限られてくる。そこで、農家に説明してもらうのではなく、当法人のスタッフが説明するようにしている。北海道の十勝では、農家に代わって案内する専門の業者もある。
- ・ 教育旅行：最近積極的に行っているのは、親子での農業体験である。レンコン掘りなどは、地元の人でも未体験の人が多く。
- ・ 最も人気があるのは、カエルやクワガタなどの生き物である。

体験プログラムの考え方は、市民が自分の趣味や特技を活かした体験と普段からやっていること、家にいる普通の人に表に出てもらうということを基本にしている。

観光業界としては滞在時間をいかに伸ばすかが大きな命題であるが、われわれは、宿泊旅行は1年に1～2回であっても、やってみたいことはたくさんある人に短い時間でプログラムを提供すれば、需要側・



年間100回以上の
体験プログラムの
事例を紹介

・講演 ・視察受入
・インターン
・セミナー開催 など

<ご依頼・ご相談はコチラ>

供給側双方にとってメリットがあるのではないかと思っている。

もうひとつは、「持ち帰り」である。料理の体験が多いが、できれば作った料理を持ち帰ってもらえれば、体験を共有でき、リピートにもつながると考えた。

当初は、プログラムの件数を増やすことを目標としていたが、催行率が 65%程度で、そうすると提供する地元の人が自分は人気がないなどと考えてモチベーションが下がることもある。

そこで 2012 年からは、量ではなく質を高めようという姿勢に変えた。そうするとニッチ市場であり、参加者と会員、参加者同士、参加者とスタッフの関係性が濃くなる。

参加者にはお客様ではなく、ファンになってもらう。双方がファンになる。リピーターからサポーター、担い手になった例や、リピーターから地元の人と結婚して移住した人もいる。

施設の関係等で規模を絞るため、マネージメントしやすいという面もある。

アジアからの留学生 150 名を対象にわら細工体験を提供したこともある。

特徴は、やりたいことが常に先である。会員・スタッフのやりたいことを優先している。やりたいことに応じて、体験プログラムやツアー、受託事業などで実現し、商品化できない場合でも助成金などを活用して取り組むようにしている。第一の顧客は、会員、市民である。市民の目的を達成することが優先される。その面では、マーケットインと考えている。一般の参加者に対しては、プロダクトアウトである。

本日、レンコン会席を食べるツアーを行っているが、もともとはスタッフがお店にレンコンを持ち込んだのが始まりで、最初は体験プログラムであったものが今では旅行会社が仕入れる商品になっている。

業としての確立が必要だ。今は個人の志に頼ることが多いが、ビジネスとして成り立たせたいと考えている。体験プログラムで稼げるのはお金ではなく、信用ではないかと思っている。団体としてはもうかっていないが、会員には年収の 3 分の 1 くらいまで稼ぐ人も出てきている。

信用とは、事業の実績と団体や企業とのネットワークである。各種受賞もしている。質的なことを評価されてきている。

受賞歴

- 平成 27 年度過疎地域自立活性化優良事例表彰 総務大臣賞（総務省）
- 2015 年度グッドデザイン賞「体験プログラム」（公益財団法人日本デザイン振興会）
- 第 7 回フード・アクション・ニッポン アワード 2015 食文化・普及啓発部門 優秀賞（農林水産省）
- 生物多様性アクション大賞 2017 審査委員賞（国連生物多様性の 10 年日本委員会（UNDB-J）・環境省）
- 第 5 回グッドライフアワード 実行員会特別賞「環境社会イノベーション賞」（環境省）

信用を換金する方法として、受託事業、指定管理業務を行っている。

最近では属人的サービスを継続するために、マニュアルで営業可能なサービスの開発が必要と考えている。現在は、徐々に市民活動から事業化していく過渡期にあるため、ひずみも出てきているので、解決方法を考えている段階にある。

継続が説得力になっているが、喜ばれないものはやめるということも大切だ。人を巻き込むためには、成功体験を積み重ねて説得力が増すと思う。

最終目標は、地域のグランドデザインとしての観光であるが、地域のなりたい姿を活動で示していきたい。その先には農業だけでなく、多様な職業・働き方のある地域であってほしい。

● 意見交換

田中：言葉ひとつひとつが心に入ってきた。付加価値型・規模拡大型の農業が進んでいるが、今日の話は実践の中から生まれてきて、それを発信して行くということか。

伊藤：すべて体験からである。農家が肉屋を始めるという選択肢もあったが、失敗して田んぼまで手放すことになってしまうことが多かった。そのため、農家は農業だけやっていたら良いというのが慣習であった。人に伝えるには言葉が必要と考え、出てきた言葉が「食業」である。それが六次産業化の原点になっている。

田中：観光分野では農泊が増えるのか。

伊藤：民泊を増やしたいと考えている。それから空き家の活用である。

田中：それしかないだろう。南砺ではホテルは作れないので、地域をホテルにすることを考え、空き家をゲストハウスにしようと考えている。食堂はそのままレストランになる。

くりはらツーリズムネットワークは、仙台へのPRはどのようにしているか。

大場：とくに行っていない。口コミである。チラシの作成は経費が掛かりすぎる。ニッチなものは探してきてくれる。SNSは最近ようやく反応が増えてきた。

田中：栗原市農泊推進協議会と一般社団法人くりはらツーリズムネットワーク及び観光物産協会の関係性はどのようなものか。

大場：栗原市農泊推進協議会は、くりはらツーリズムネットワークが中核団体で、栗原市と観光物産協会、くりはらファーマーズプロジェクトという若手農家のグループで作っている団体である。これは、民泊や農家民宿の担い手づくりや、宿泊と体験プログラムの組み合わせで商品造成に取り組んでいる。観光物産協会は、全体のプロモーションを行っている。

田中：南砺市は合併したため、体験メニューをもっている地域はいまだにそのエリアのメニューだけを持っている。栗原は10地域の合併であるが、活動の範囲はどのようにになっているか。

大場：合併前にグリーンツーリズムのブームの際に一緒に活動していた人たちが主力で、別の地域では林業体験に取り組んでいる人や山の方では自然体験の人などを集めて取り組んでいるので、全市域的な活動となっている。

丁野：栗原の最大の課題だ。いろいろな地域にそれぞれの活動があり、観光協会があり、今後どのような活動を目指していくのが課題だ。館林では、「里沼」として周辺も含めて取り組んでいこうとしている。

宮口：南砺の場合は、行政がリードしすぎている。民間がリードする形にすべきだ。

丁野：市民主導では、行政との関係が作りにくい面もある。

井上：小規模多機能自治だ。

丁野：今日の話は今後のヒントがたくさんある。農村の生業はどうしても農としてしか見てこなかった。しかし、モノをつくる、ものを楽しむということにあらゆる産業が入っている。産業観光も同様の流れになってきている。農場見学などは豊かな資源がある。今後スタッフを増やすためにどのようなことをしていくか。栗原手づくり市「十文字商店」の収益の状況はどうか。

大場：直売所に並ばないようなものを紹介してきていたが、オリジナル商品を伸ばしていきたい。

丁野：外に出していくべきではないか。

井上：栗原の取り組みは、オンパクの手法と同じだ。それでは儲からないので、もうひとつ工夫しないと事業化としては難しいと思う。

宮口：「生き方」としてどうなのかという価値の見方であり、それを否定してはそもそも農村文明創生日本塾の意義が無いのでは。

大場：手法はオンパクから学んだが、姿勢が違うと思って離れた。しかし、中身としては前から取り組んできたことをPRの手法としているだけで、今はあまり意識していない。やりたいことにブレは全くない。しかし、持続するためには新たな事業化に取り組んでいく必要がある。

丁野：民泊をマネジメントできるのは伊豆沼農産だろう。

伊藤：エージェントを頼らざるを得ないことはあるが、農家と直接の取引はできないので、受入れの組織が

必要だ。農家の信頼も必要だ。それが日本に 100 ヶ所でできれば面白いと思う。

■ 講演：宮口 侗廬 氏

早稲田大学名誉教授

栗原には麦屋弥生さんから紹介され通うようになった。麦屋さんは市役所の職員何名かと地域の中を歩き、地域の資源に気づいていないことを指摘していた。その「田園観光に向けて」の報告書ができる前に地震があり、麦屋さんが駒の湯旅館で亡くなってしまった。関係者には相当なショックだったことと思う。

大場さんは市役所を辞めて、ツーリズムに取り組むようになった。私に背中を押されたと言っているが、麦屋さんの影響があつて決意したのであろうと思う。皆さんには応援してほしい。

栗原から大崎に至る広大な水田地帯で、とりわけ栗原は日本の農村風景としてはピカイチではないかと思う。南砺市の砺波平野も素晴らしい農村風景であるが、富山は工業県なので、写真を撮ると工場がひとつやふたつ写ってしまう。それが無いのがこの地域である。経済的には厳しいが、衰退する農業ではなく、農業を資源にした新しい取組が生まれている。

伊豆沼農産の伊藤社長の話には哲学的なことが含まれていた。

農業政策はいま、規模の拡大ばかりで農村の価値を失うような方向が主流になっている。効率化と農村社会の維持が車の両輪ということが揺らいでいる。

～日本の山にはなぜ木が生えているのか～

初めてヨーロッパを歩いた時に、イタリアやスペインの山に木がないことに驚いた。写真は、スペイン中部の山で、木が一本もない。下の方は麦畑である。しかし、日本の山は田んぼの際まで木が生えている。こういう風景は世界中日本にしかない。

なぜかという、裏山は入会林といって集落のものであった。諸外国では山は別の人の所有である。ヨーロッパの場合は家畜を飼うための牧草地にした。

ヨーロッパの小麦畑の価値は、今でも日本の水田の 8 分の 1 程度しかない。畑だけでは十分な食糧が得られなかったヨーロッパでは、山の木を伐採し牧草地に変えて食べるための家畜をひたすら増やしたため木がない。ドイツは反省して、その後木を植えた。

イタリア・スペインでは夏に日本よりも暑くなることが多く、高気圧が真上にあるために雨が少ない。そのため味の濃いブドウができ、良質のワインができるのである。土地が肥え過ぎていても良くない。厳しい環境で味の濃いブドウとなる。

日本では、田んぼの生産力が極めて高いため、裏山で食べ物をつくる必要がなかったことがある。

栗原もだいたい下まで木が生えているのは、米の力のお陰である。

日本の農村が戦後話題になったのは、いかに封建的な地域社会かということで、日本の農山村をやり玉に挙げられたことである。しかし、長い年月受け継がれてきたために関係が固まっていて、若い人が新しく何かを言い出してもなかなか通らないということはあったが、我が国の農山村は、世界の中でもかなり素晴らしい暮らしの場であったと思う。

よく貧乏なことを卑下して「三反百姓」という言葉があるが、日本の田んぼは三反で生きてこられたのである。それほど生産力が高かったのである。ヨーロッパでは今でも畑の価値を「蒔いた種の何倍採れるか」という習慣がある。日本では聞いたことがない。今の日本の田んぼは千倍以上採れる。遠野で、一粒の米から何粒採れるかを調べたことがある。間隔をあけて育てても 2 千粒を超えたという。ローマ帝国のころの小麦畑は 2～3 倍である。したがって種麦を半分も残しておく農業であった。今では相当進歩はしているが、



木が1本もないスペインの山と小麦畑

種は相当多く蒔いているようだ。

富山県で「小作地券」の存在を知った。地主小作関係は、負の側面として語られてきたが、諸外国の地主小作関係は非常にシビアで地主にいらまされると翌年は借りることができない。ところが日本では、簡単には地主が切ることができなかった。しかも、小作人同士が地主に関係なく小作権を売買していた証拠が「小作地券」である。日本の農民は村人であるということで相当保護されていたことがわかる。

日本では「村八分」というものがあるが、残り「二分」があるということが日本の農村の価値であると思う。火事と葬式だけは手伝うという、大変な時には助けてくれるということである。

農山村は人口が減少してきたが、過去の人口が多かった時代を再現するのではなく、地域で生産と生活のシステムをつくることができるかを原点から見直すべきであると思う。先進的な少数社会をつくるセンスが大事である。地域づくりとは、「時代にふさわしい地域の価値を内発的に作り出し、地域に上乘せる作業」と定義したが、伊豆沼農産の取組はまさにその取組である。

農山村は同じ顔ぶれで外部の人とあまり付き合う必要がなかったため、交流が苦手であった。しかし、それを突き抜けて新しい交流を始め、地域に新しい価値をもたらすような人材がたくさん出てきている。

地域を訪れて素晴らしさを伝えても、東京でくらしているからよく見えるのであろうと言われたが、それは20年前の反応であった。今では相当違ってきている。それは、様々な交流の積み重ねによる「交流の鏡効果」である。

自分たちの持つワザを普遍的に育てる、ワザはみんな持っているので、それに普遍的なまなざしが加われれば、大切なことが見えてくる。伊豆沼農産の話からは普遍性を強く感じた。

かつて大都市の学生を2～3週間地方に派遣する「地域づくりインターン事業」で世話人を務めたが、それに参加した学生が今や地方を支える立派な人材に育ってきている。地域おこし協力隊は、そのようなもろもろの取組を強力にしたものである。

10年以上前に「一集落に一カフェを」ということを言ったが、「場」があれば交流が生まれる、そこで地域の人と外の人が語るきっかけになる。伊豆沼農産の「しゃべり場」がそれにあたる。

ワザは10年・20年で消えていくかもしれないが、たとえ人口は少数であっても、元気な若者が移り住み、土地や資源を活用する手立てが生まれれば、地域は都市とは異なる価値を持つ暮らしの場として活かされる。

平成の合併を進めるために、「一部過疎」という制度を作った。それはいままでに過疎地域の指定を受けている小さな町村は、大きい都市と合併しても過疎地域の扱いをするというものであった。南砺市や栗原市はまとめて「過疎」となっているが、中核的な市では、「過疎債」のことを幹部は誰も知らない。そのため、特別扱いしてもらえないということがある。

日本の全体人口が減少するときに、どこを特別に過疎地域として支援しなければならないのか判断するのが難しい時期に入ってきている。そこで、都市にはない価値を前面に出していかなければならない。

地域は都市とは異なる価値を持つ暮らしの場として活かされる。単に農業の規模拡大で収入が増えるということとは違う。そこには蓄積された人間の価値が含まれていなければならないと考える。

都市における格差問題があり、また最近は都市しか知らない若者がいて、農村を訪れる若者は、われわれが知らない外国に行きたいと思っていたのと近い感覚になってきているのではないかと思う。

都市の若者は農村にはないワザ、例えばITなどで、遠くの人との付き合い方やメディア的な発信など、昔の田舎の人が苦手としたことができる。そのため、少し雰囲気が変わってきている。

マスコミも田舎を扱う番組が増えた。そこでは都市とは違う価値が語られるようになった。

農山村に住み着いた若者がまず感心するのは「田舎の人は何でもできる」ということである。生きるためのワザをたくさん持っている。それらが盛り上がったので、そろそろしばむのではないかという心配はある。



今の農山村は多彩なワザを持つ高齢者によって、穏やかな暮らしの場として維持されているのであり、一般的には将来のさらなる人口減少は避けられないということでもある。そのため、土地と人材を含む資源を新しいワザによって活用する「先進的な少数社会」をつくり上げていく必要がある。

若い世代は、手仕事をすぐに身に着けることは困難であっても、パソコンやSNSを駆使することによって、小さなビジネスを立ち上げる可能性は十分にある。半農半Xといわれるように、小さなナリワイの組み合わせが可能であることも心強い。農業や林業の手伝いや塾の講師をやっている協力隊員もいる。久米島では協力隊に中学生の学習指導をさせている。

伊藤社長は中学校区に意味があると言っていた。過疎問題懇談会では、集落が支え合えなくなったときに、小学校区で新しい仕組みを作ろうと話している。平野部に近いところでは中学校区くらいが集まりやすいかもしれない。

空き家や土地、山など私的所有に係る財産の持ち主がわからない例が出ているが、法律的に抜本的なことは生まれていない。自ら管理できない建物や土地は、準公共財と考えたい。北海道のニセコ町では、水源地の売買は町の審議会の認可を得る必要があることになった。

大きな自治体では動きにくい、小規模な自治体では、流出している人材の情報をキャッチすることはそれほど困難ではないので、直接のアプローチをしても良いのではないかな。

IT環境など、時代にふさわしい普遍的な環境を整える一方で、都市にはない暮らしの場としての価値づくりを積み重ねることが農山村の地域づくりの基本であると考えている。

● 意見交換

田中：人口が減っていく中、10万人以上の都市でも過疎になる。最後はどのように線引きするのか。

宮口：函館が26万人でも過疎に指定されている。個人的には線を引きたい。

田中：多様性の時代になり、農村と男性社会の変化や女性の活躍の必要性など。カフェなどは女性の力の活用ではないか。

宮口：過疎農山村で活性化しているところはほとんど女性の力だ。集落ネットワークや地域運営組織では、家単位ではなく人単位で集まるようにするのが基本だ。

田中：福祉のことで集まるのはおばあちゃん、男は出てこない。男性を引っ張り出さなければならないが、お酒を出すと女性が出てこない。

丁野：現場では女性が動いているが、協議会などには女性は出ない。

井上：一番農業が忙しい時期の昼間に、女性に手紙を出して集めた。行政からの依頼だから残った家人に頼んで出てきてくれた。忙しい時に敢えて出した。免罪符になって昼間に出ることができた。そこから社会参画につながった。

佐々木：女性の農家の団体から参画してもらうのに6～7年かかった。どこに行くのでも役場の農政課や企画課、商工観光課なども行かせて説得した。

伊藤：最後に地域を救うのは女性だ。

丁野：継続的にできるのは女性かもしれない。続けるのが強みだ。地域おこし協力隊でも当初と比べて変わってきたのではないかと感じている。自分がどこの地域に行けば活躍できるかを探している。広島県の呉市の島しょ部でミカン畑を経営している人がいるが、ミカンを作りたくて室蘭から来た人である。柏崎ではわざわざ辺鄙なところで酒蔵をやりたいという人もいる。すぐに酒蔵はできないので、今は酒米づくりをしている。そこには競合がないから選んできている。協力隊員も成熟してきたのではないかな。



宮口：横並びでなく、特徴を出さないと来てくれない。くりはらツーリズムネットワークなどに入れば、将来スタッフとして残れるのではないかな。

田中：制度が始まったころは、行政はどう使ったら良いかわからなかったもので、普通のアルバイトのようにして使っていたりした。今は仕事を決めて募集するようになっている。農家になりたくて南砺に嫁に来た人がいる。

井上：女性は経営者になりたい。

佐々木：遠軽町は、山林が非常に多く、林業には若者がたくさん来ている。林業は会社形態のため入りやすいのかもしれない。農家は資金力も必要になる面もあるかもしれない。

田中：南砺市では、事業承継ツアーに取り組んでいる。農業をやりたい人や老舗の旅館のおかみなど。

伊藤：農業法人は、ようやく事業承継が始まった。利益体質でも継承者がいないために廃業するケースがある。そのため、農業法人をターゲットにしたM&Aの会社が増えている。普通の会社のPL・BSをみられる人でも、技術の部分があるため農業の経営は簡単には見られない。そういうところに協力隊の情報などを送れば、いいマッチングができるのではないかな。

■ 挨拶：二階堂 秀紀 氏

栗駒山麓ジオパーク推進協議会 事務局長

2日間に亘ってパイロットツアーにご一緒させていただき、栗原をご覧いただいた。いろいろな人材をひとつにするように宮口先生からアドバイスをいただいた。「栗原総合おもてなし会社」を作りたい。観光物産協会も栗駒山麓ジオパーク推進協議会もくりはらツーリズムネットワークも、どこかでひとつにした。そこに行けば栗原のコーディネートがすべてできるような会社ができればいいという夢がある。市民総ガイドで、観光でもジオパークでも、専門的でなくてもいいので、市民が場所くらいは案内できるような知識をもってもらい、受け入れ体制が完ぺきな地域であると思ってもらえればと考えている。

今後、このツアーで知り合えた人たちのところを訪ねてみたいと思った。

■ 農村文明創生日本塾 代表幹事 田中 幹夫 富山県南砺市長

みなさんに感謝したい。また、二階堂さんがおもてなし会社を作りたいということまで考えていることを知り、感心した。

今回のようなことの和を広げていくのが農村文明創生日本塾の活動のひとつである。情報共有のプラットフォームにしていきたいと思っている。みなさんにも広げていってほしい。

参加して得した、と思ってもらえるような取組を行っていききたい。

ありがとうございました。

以上

一般社団法人農村文明創生日本塾

農村文明創生ツーリズム パイロットツアー2019 ～100年後の農村文明を守り育てるしくみづくり～

一般社団法人農村文明創生日本塾は、全国の首長が力を合わせて、農山漁村に根ざした個性豊かで多様な文化や暮らしの持続と発展を目指して活動しています。

その一環として、農山漁村に脈々と繋がれてきた伝統文化・芸能・技術を伝え残すための仕組みづくりを体験・研修する「農村文明創生ツーリズム」の創生につなげていきたいと考えています。

そこで今年度は、ANA総合研究所シニアアドバイザー、(公財)日本観光振興協会特別研究員の丁野 朗氏をコーディネーターに、宮城県栗原市と登米市をフィールドにして研修ツアーを開催することになりました。

たくさんの自然災害と向きあい、知恵をあわせ工夫を繰り返し、地域に豊かさと多様な文化を育んできた経験を未来へ伝えるため、地域の地形・景観を教育、学術研究、観光、防災などに活用し、持続可能な地域づくりを目指している栗駒山麓ジオパークの活動について学ぶとともに、ラムサール条約湿地に登録された「伊豆沼」の畔で「農業を食業に変える」を原点に、地域の人やもの、環境の価値を見つめながら、生産から加工、販売まで、総合的に地域と関わりながら「農村産業」の構築を目指して活動している有限会社伊豆沼農産の「食農体験」の取組について体験・視察致します。

是非、多くの皆様のご参加を頂きたく、ご案内申し上げます。



伊豆沼・内沼

- ▶ 栗原市と登米市にまたがる東北最大の低地湖沼「伊豆沼・内沼」では、ハスの開花時期に合わせて「はすまつり」が開催される。
- ▶ 小型遊覧船に乗って、湖面いっぱいに咲き誇るハスの花を間近に見ることができる。



- ✓ 面積は、491ha（伊豆沼369ha、内沼122ha）で県内最大、水深は平均80cm、最大1.6mと浅いのが特徴。
- ✓ 沼の周辺には広大な水田が広がっており、沼の水が水源として利用されるとともに、洪水調整の役割も果たしている。
- ✓ 水深が浅いため、沼の中央部まで水生植物が繁茂しており、水生昆虫や魚類、鳥類など多種多様な生き物が生息。
- ✓ 秋から冬に極東ロシアから渡ってくるガンやカモ、ハクチョウ類の貴重な越冬場所であることから、ラムサール条約の登録湿地として国内で2番目に指定された。

7

くんべる農場レストラン



くんべる農場レストラン



手づくりウインナー



手づくりピザ



9

＜日程表＞

日程	時間割	摘 要
第1日目 令和2年 1月25日 (土)	テーマ：ジオパークと田園都市	
	13:15	東北新幹線 くりこま高原駅 集合
	13:30	バス移動
	14:00	栗駒山麓ジオパーク・ビジターセンターにて、栗駒山麓ジオパークの取組の説明と意見交換
	15:10	農村景観の視察（長屋門、がんのねぐら入り等）
	16:00	ホテルチェックイン（栗原市内「エポカ」）
	16:30	ホテル会議室で講義（講師：丁野朗氏）と意見交換
	18:00	交流会：エポカ 21 楓の間
	20:00	解散 宿泊（ホテルエポカ：宮城県栗原市志波姫新熊谷 279-2／TEL：0228-23-8866）
第2日目 令和2年 1月26日 (日)	テーマ：農村文明と田園観光づくり	
	08:30	ホテルエポカ 発（バス移動）
	08:40	くりでんミュージアム視察
	10:00	伊豆沼農産にて講演と意見交換：ラムサール広場「都市農村交流館」
	10:40	くりはらツーリズムネットワークの活動報告
	11:10	意見交換
	11:35	施設見学（直売所、生ハム工房体験室）
	12:00	昼食（伊豆沼農産）
	13:00	講評：宮口侗廸早稲田大学名誉教授
	14:30	意見交換会
	15:00	バス移動
	15:30	くりこま高原駅 着 解散 （15:59 東京方面（東京着 18:24）／16:02 盛岡方面（盛岡着 16:54））

【基調講演講師・モデレーター 丁野朗氏 プロフィール】

- 同志社大学文学部社会学科卒業。ANA総合研究所シニアアドバイザー、(公財)日本観光振興協会特別研究員、法政大学キャリアデザイン学部非常勤講師、東洋大学大学院国際観光学部客員教授、跡見学園女子大学観光観光コミュニティ学部非常勤講師
- 日本観光振興協会総合研究所長として、全国の観光を核とする地域交流ビジネス&マネージメント手法についての研究と事業開発を手掛ける。特に、地域の産業資源を活用した産業観光など、ツーリズム・イノベーションのための事業を数多く実施。日本商工会議所観光専門委員として地域の一次産業から六次産業までの幅広い産業創出事業にも係る。国土交通省、観光庁、経済産業省、農林水産省など関係省庁の各種政策形成にも係わる。



■交流会 1月26日（日）18:00～20:00 （参加費：7,000円）